

避妊・去勢を考える

— 今ある生命を大切に —



毎年たくさんの犬や猫が捨てられ、おげくの果てに殺処分されたりしています。不幸な犬や猫をなくすために、私たちは何をしたらいいのか、地道にこの活動を続けている小野絵里さんの意見をまとめてみました。

「おみゆく箱舟」 小野絵里作 1998 162.2×130.3

4

“放つはおけない”

小野絵里さんは、安井賞展の最終候補に残る等の実績を持つ画家です。彼女の絵には、たびたび動物たちが登場します。小さい時から他者を傷つけたり、戦争や環境破壊等の暴力が理解出来なかった「小野さんにとって、強くなりすぎた人間の、動物をはじめとする他の生命への抑圧は耐えられないことなのです。彼女はその気持ちを、鎮魂と彼岸への願いをこめて画面に描きます。

小野さんは現在、団地で犬を3匹、猫を10匹飼っています。

“ボリスがきた”

小野さんが犬、猫を飼う直接的なきっかけとなったのは、一匹の猫でした。あとで「ボリス」と名づけられたその猫は、中庭

8年前、この団地に越してきた当時には考えられなかったことです。

当時、団地の周囲は、米軍キャンプ跡の広大な空地でした。米軍がおいていった犬に加え、恰好な捨て場となった空地には、30〜40頭もの犬が群れを作っていました。近所の人の通報で犬を処分しようとする行政があちこちに捕獲箱を設けたので、毎晩のように、捕まった犬の悲鳴が聞こえて眠れなかったそうです。

にうすくまっていたが、ガリガリにやせ、傷だらけで、まるでボロ雑巾のようでした。近所の人の話では、猫は団地

の子どもたちのなぐさみものになって、すべり台から落とされたり、ボールをぶつけられたりしていましたが、それに逆らう力も残っていないのでした。

獣医さんに、「生きてせいぜい1年」といわれたボリスでしたが、やがて健康を取り戻し、今年で8年になります。毛も逆立てたこともないほど穏やかで賢いボリスによって、小野さんは団地でも他人に大した迷惑をかけずに動物を飼うことを知ったのです。

そのあと、小野さんは次々と犬や猫を引き取ることになり

した。団地の屋上から突き落したり、背中にガソリンをかけて火をつけたり、肢先をナイフで切り取るような子どもによる陰惨なイジメの的になる犬や猫が絶えず、放つはおけません。

こうしたイジメは、もしかしたら全国各地で起きているので

